

中学生の親族呼称の認知¹

関西大学 田 中 俊 也
名古屋大学 杉 村 伸 一 郎
福井大学 大 野 木 裕 明

The cognition of intra-familial kinship terms among junior high school students

Toshiya Tanaka (*Department of Psychology, Faculty of Letters, Kansai University, Yamate-cho, Suita 564*), Shinichiro Sugimura (*Department of Educational Psychology, Faculty of Education, Nagoya University, Furo-cho, Chikusa-ku, Nagoya 464-01*), and Hiroaki Ohnogi (*Faculty of Education, Fukui University, Bunkyo, Fukui 910*)

A cognitive task concerning intra-familial kinship terms was imposed on 125 junior high school students (male 57, female 68). Forty-six questions were read successively and subjects were required to answer each item. These questions consisted of two types; one required the subjects to identify various familial relationship (e.g. "my uncle") from everyday description (e.g. "my parent's brother"), and the other presented relationship through legal degree of relationships (e.g. "my parent's parent's male child, other than my parent"), some questions of both types containing redundant information concerning gender. The main results were as follows. (1) Correct percentages on lineal relatives regardless of question type were very high. (2) High correlation between related gender-differentiated kinship terms was observed. (3) While questions employing ordinary expressions yielded higher correct percentages than those expressed in legal terms, redundant information reduced correct percentages when combined with ordinary expression.

Key words : familial kinship terms, kinship, formal operations, junior high school students.

本研究は、親族関係や自他の間柄について中学生低学年の段階でどれほどの理解がなされているのか、そうした理解は日常的に経験した呼称表現形式とどのような関係にあるのかを探るものである。

学校教育における親族関係と呼称の学習は、小学1年生の教科「国語」の中で、「おじいさん」「おばさん」などを例として、名詞の理解を促すことから始まる。それ以後は漢字の学習との関連で体系的に個々の呼称が初出する。体系的な取扱いは、はるかに遅く、義務教育の最終段階の中学校「公民」の中で親等数の計算方法を中心にして取り扱われる。したがって、現実には、親族の呼称の理解や学習は、学校教育に先だって日常経験の中で進むのが普通であるといえるだろう。

日常経験からの呼称理解には、少なくとも2つの経

路が考えられる。第1は、呼称は個別事例につけられた名称として獲得される可能性である。たとえば、名古屋在住のおじさんは、しばしば「名古屋のおじさん」と呼ばれ、福井に住むお母さんの妹は「福井のおばさん」と呼ばれる。さらに、「福井のおばさん」という場合、「福井のおばさん」という1つの名前として理解しているのか、「福井に住むおばさん」のこととしているのか判定も難しい。また、「おばさん」についても、自分の父親の兄弟姉妹であるという自他の関係が理解されている場合と、単に「おじさん」と性別を区別するだけの段階に留まっている場合があるだろう。そのうえ「おじさん」と「おばさん」では、性別は必要な情報になるが、「いとこ」については、性別はさしあたっては冗長な情報となる。

第2に、呼称の持つ、同一の概念的な外延を理解するという可能性である。たとえば、名古屋に住んでいようと、大阪に住んでいようと、また、自分の「父」に

¹ 本研究の一部は、日本教育心理学会第30回総会において発表された。

とってお兄さんにあたる人であろうと、弟にあたる人であろうと、いずれの場合も“オジ”であることを理解する。この定義は法律上の親等表現と関わる。

このような概念の理解を調べるために、本研究では、“いとこ”などの概念を正解とする質問文を準備することによって、親等や親族の間柄の相互関係を探ることに焦点をあててみた。

質問には2つの形式が考えられた。1つは、日常的に用いられている表現方法であり、もう1つは親等的表現を再現する方法である(以下それぞれ日常的表現、親等的表現と略する)。“甥”を例にして説明する。日常的表現では、“甥”は、“自分の兄弟・姉妹の男の子ども”である。他方、親等的表現では、“甥”は、“自分の親の子どもで自分以外の子ども(の男の子ども)”として記述される。呼称には性別を含む場合と、そうでない場合がある。特に親等的表現では同じ呼称の表現方法が数多くある。たとえば、“オバ”は“自分の男(女)の親の男(女)の親の子どもで自分の親以外の女の人”と記述される。この場合4通りの記述例ができる。

質問項目の作成にあたっては、より網羅的であるようにと心がけたが、項目数の多さによる解答の放棄を考慮して、17の呼称について合計46の質問項目を準備した。これには、大学生を対象とした72項目の調査結果(大野木・杉村・田中、1991)を参考にした。

方 法

調査対象と時期

愛知県土岐市T中学校1年生4クラス計156名(男子72名、女子84名)である。1986年の12月中旬に実施した。

手 続

調査はクラス単位で一斉に実施した。46項目の質問が書かれた調査用紙と回答用紙を配布し、調査者が1項目ごとに繰り返して2回音読し、回答用紙に呼称の記述を求める半強制法を用いた。全項目終了後10分程度の回答見直しの時間をとった。

結果と考察

1. 分析の対象

“父”“母”についての合計4つの質問項目をスクリーニング項目として用いた。1つでも誤答のある者または合計正答数が分布の平均から標準偏差の2倍を超える者については、解答用紙の記入状況を吟味し、合議のうえ分析の対象から除外した。これらの多くは、

明らかに後半の項目の解答を放棄した者であった。最終的には125名(男子57名、女子68名)を分析の対象とした。まず、男女別に平均正答数を求めたが性差はみられなかった(男子30.44、女子31.68)、男女を込みにして分析を進めた。

2. 概 観

全項目の平均正答率は31.25(標準偏差8.27)であった。項目ごとにみたものがTable 1である。

正答率80%以上をひとつの目安として高い項目を概観すると以下のものである。“弟(項目44、項目18、項目29)”“姉(項目32、項目4、項目40)”“兄(項目39、項目23、項目1)”“祖母(項目8)”“妹(項目7、項目25、項目14)”“祖父(項目27、項目35)”“曾祖父(項目42)”。いずれも兄弟か自分より上の直系親族であった。兄弟姉妹に関する項目はすべてここに該当している。

同様に正誤率30%以内を1つの目安として低い正答率を示す項目(低正答率群)をみた。“イトコ(項目5)”“姪(項目26、項目41、項目2)”“甥(項目22、項目37、項目24)”がみられた。これらは家系図的にみて自分より下の位置にある。特に甥・姪に関する項目のすべてが該当している。このような傾向の理由として考えられる解釈の一つは、子どもの数が減少化しているためこの種の呼称が日常的に聞かれる機会が少なくなったことが考えられる。また、調査対象が中学1年生であったために現実に近親者に甥・姪・イトコ等がないということもあるだろう。これらは、傍証ではあるが、身近な生活上の経験から非体系的に呼称に馴染んでいく経路が存在することを推測させる。

同一呼称であるが極端に正答率の異なる項目対も3つ見出された。(1)項目34“孫”(76.00%)と項目43“孫”(50.40%)、(2)項目38“曾孫”(63.20%)と項目45“曾孫”(48.80%)、(3)項目30“イトコ”(49.60%)と項目5“イトコ”(27.20%)。これらの対の前者は日常的表現であるのに対し、後者は冗長な情報を付加した日常的・親等的表現である。

3. 呼称別の平均値と相関係数

呼称別に平均値を求め、あわせてピアソンの相関係数を算出した。結果はTable 2に示される。

曾祖父・母、祖父・母、兄弟・姉妹の平均値は、だいたい0.80以上になっている。それに対して、甥、姪、イトコなどは、かなり低い平均値に留まっている。相関係数について、呼称別に最も高い相関値に着目すると、[曾祖父—曾祖母][祖父—祖母][兄—姉][弟—妹][オジー—オバ][甥—姪]といった、対応する日常概念間に関する呼称が列挙された。対応する呼称をも

Table 1
項目ごとの正答率

番号	呼称	質問表現形式	正答率(%)
44	弟	自分の“きょうだい”で、自分より年下の男の人を何といますか。	93.60
32	姉	自分の“きょうだい”で、自分より年上の女の人を何といますか。	92.80
39	兄	自分の“きょうだい”で自分より年上の男の人を何といますか。	92.00
8	祖母	自分の“親”の“親”で、女の人を何といますか。	91.20
18	弟	自分の“親”の“子ども”で、自分より年下の男の人を何といますか。	90.40
7	妹	自分の“きょうだい”で、自分より年下の女の人を何といますか。	89.60
27	祖父	自分の“親”の“親”で、男の人を何といますか。	89.60
23	兄	自分の“親”の“子ども”で、自分より年上の男の人を何といますか。	88.80
35	祖父	自分の“男の親”の“親”で、男の人を何といますか。	87.20
1	兄	自分の“男の親”の“子ども”で、自分より年上の男の人を何といますか。	84.00
25	妹	自分の“親”の“子ども”で、自分より年下の女の人を何といますか。	83.20
4	姉	自分の“女の親”の“子ども”で、自分より年上の女の人を何といますか。	82.40
40	姉	自分の“親”の“子ども”で、自分より年上の女の人を何といますか。	82.40
42	曾祖父	自分の“親”の“親”の“親”で、男の人を何といますか。	82.40
29	弟	自分の“男の親”の“子ども”で、自分より年下の男の人を何といますか。	80.80
14	妹	自分の“女の親”の“子ども”で、自分より年下の女の人を何といますか。	80.00
11	祖母	自分の“女の親”の“親”で、女の人を何といますか。	79.20
34	孫	自分の“子ども”の、その“子ども”を何といますか。	76.00
36	オジ	自分の“男の親”の“男の親”の“子ども”で、自分の親以外の男の人を何といますか。	76.00
3	曾祖父	自分の“男の親”の“男の親”の“親”で、男の人を何といますか。	75.20
15	オジ	自分の“親”の“親”の“子ども”で、自分の親以外の男の人を何といますか。	75.20
19	オバ	自分の“親”の“きょうだい”で、女の人を何といますか。	73.60
6	曾祖母	自分の“女の親”の“女の親”の“親”で、女の人を何といますか。	72.80
16	曾祖母	自分の“親”の“親”の“親”で、女の人を何といますか。	72.80
21	オバ	自分の“親”の“親”の“子ども”で、自分の親以外の女の人を何といますか。	72.80
9	オバ	自分の“女の親”の“女の親”の“子ども”で、自分の親以外の女の人を何といますか。	72.00
31	オジ	自分の“親”の“きょうだい”で、男の人を何といますか。	70.40
38	曾孫	自分の“子ども”の、その“子ども”の、さらにその“子ども”を何といますか。	63.20
10	孫	自分の“女の子ども”の、その“子ども”で女の人を何といますか。	60.80
20	曾孫	自分の“女の子ども”の、その“女の子ども”の、さらにその“子ども”で女の人を何といますか。	52.00
43	孫	自分の“男の子ども”の、その“子ども”で男の人を何といますか。	50.40
30	イトコ	自分の“親”の“きょうだい”の“子ども”を何といますか。	49.60
45	曾孫	自分の“男の子ども”の、その“男の子ども”の、さらにその“子ども”で男の人を何といますか。	48.80
17	イトコ	自分の“女の親”の“女の親”の“子ども”で、“自分の親以外の女の人”の子どもを何といますか。	32.80
12	イトコ	自分の“親”の“親”の“子ども”で、“自分の親以外の人”の子どもを何といますか。	31.20
5	イトコ	自分の“男の親”の“男の親”の“子ども”で、“自分の親以外の男の人”の子どもを何といますか。	27.20
26	姪	自分の“きょうだい”の“子ども”で、女の人を何といますか。	23.20
22	甥	自分の“きょうだい”の“子ども”で、男の人を何といますか。	20.00
37	甥	自分の“男の親”の“子ども”で、“自分以外の男の人”の“子ども”で男の人を何といますか。	17.60
41	姪	自分の“親”の“子ども”で、“自分以外の人”の“子ども”で女の人を何といますか。	15.20
2	姪	自分の“女の親”の“子ども”で、“自分以外の女の人”の“子ども”で女の人を何といますか。	12.80
24	甥	自分の“親”の“子ども”で、“自分以外の人”の“子ども”で男の人を何といますか。	11.20

Table 2
呼称得点間のピアソンの相関係数と平均呼称得点

呼称	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	平均	SD
1 曾祖父	.76*	.46*	.47*	.30*	.28*	.44*	.36*	.45*	.49*	.22*	.31*	.21*	.20*	.32*	0.79	0.34
2 曾祖母		.32*	.46*	.36*	.40*	.46*	.46*	.41*	.47*	.30*	.45*	.27*	.26*	.38*	0.79	0.36
3 祖父			.57*	.31*	.17	.41*	.32*	.25*	.30*	.33*	.28*	.19*	.10	.28*	0.88	0.26
4 祖母				.26*	.15	.32*	.40*	.31*	.32*	.25*	.36*	.17	.13	.28*	0.85	0.28
5 兄					.63*	.55*	.53*	.34*	.36*	.19*	.25*	.24*	.26*	.27*	0.88	0.23
6 姉						.58*	.50*	.41*	.40*	.34*	.39*	.24*	.24*	.28*	0.86	0.26
7 弟							.68*	.36*	.45*	.22*	.37*	.17	.18*	.35*	0.88	0.24
8 妹								.33*	.38*	.22*	.33*	.16	.19*	.34*	0.84	0.26
9 孫									.74*	.28*	.40*	.36*	.36*	.42*	0.62	0.39
10 曾孫										.37*	.38*	.40*	.38*	.46*	0.55	0.43
11 オジ											.74*	.27*	.24*	.28*	0.73	0.35
12 オバ												.24*	.19*	.29*	0.74	0.33
13 甥													.73*	.25*	0.16	0.31
14 姪														.27*	0.17	0.33
15 イトコ															0.35	0.34

* $p < .05$

たない“孫”は“曾孫”と，“イトコ”は“曾孫・孫”と高い相関関係になっている。これらの結果は、呼称の概念が日常生活の中で対比的に獲得されることを示唆している。

4. 呼称表現形式による得点の比較

呼称の表現形式別に検討するために、日常的表現と親等的表現、性別という冗長な情報の有無の2次元から各項目を分類して比較した。結果がTable 3である。

冗長な性別の情報を持たない同士での日常的表現項目と親等的表現項目の間では、平均値に有意差がみられた ($t=4.14$, $df=124$, $p<.01$; $r=.65$)。また、冗長な性別情報の有無の比較では、日常的表現下では有意差が見出されたが ($t=3.94$, $df=124$, $p<.01$; $r=.69$)、親等的表現下では有無による差は認められなかった。

このことから示唆されるのは、次のようなことである。たとえば、“自分の親の親の子どもで自分の親以外の人(オジ, オバ)”という親等的表現では、“自分”を起点として家系図的に1つ上り(親)、さらに1つ上へ進み(親の親)、そこから再帰的に1つ戻る(親の親の子ども)という心的操作が必要である。また、“自分以外の…” “自分の親以外の…”では、自分を含む集合を考え、その補集合をイメージすることが要求される。この場合にはおそらく、“自分の親のきょうだい”という日常的表現よりも、多くの心的操作を要求されるために課題の遂行が困難となる。しかしながら、同時に

Table 3
表現形式得点

	表現形式	項目数	平均	SD	相関係数
□	日常的・非冗長	9	6.05	1.70	.65*
	親等的・非冗長	9	5.50	1.82	
□	日常的・非冗長	6	4.75	1.55	.68*
	日常的・冗長	6	4.27	1.82	
□	親等的・非冗長	9	5.50	1.82	.79*
	親等的・冗長	9	5.38	2.15	

* $p < .05$

そうした操作のために性別という冗長な情報を付加されても、その影響をあまり受けなくなると考えられる。

これまで青年前期・中学生段階での知的能力の構造や発達を検討する研究としては、たとえば Piaget の理論が知られてきた。Piaget 理論では、この時期は形式的操作期として説明されており、実際にもいろいろな課題を用いた研究 (Capon & Kuhn, 1979; Haukins, Pea, Glick, & Scribner, 1984; Inhelder & Piaget, 1958) が試みられている。親族の間柄の理解を扱った本研究がこれら形式的操作の諸研究と関連することは十分考えられるところであるが、詳細は今後の検討課題として残されている。それには、調査項目の洗練やノーマティブなデータの蓄積を必要とするだろう。

引用文献

- Capon, N., & Kuhn, D. 1979 Logical reasoning in the supermarket: Adult females' use of a proportional reasoning strategy in an everyday context. *Developmental Psychology*, **15**, 450-452.
- Haukins, J., Pea, R., Glick, J., & Scribner, S. 1984 "Merds that laugh don't like mushrooms": Evidence for the deductive reasoning by preschoolers. *Developmental Psychology*, **20**, 584-594.
- Inhelder, B., & Piaget, J. 1958 *The growth of logical thinking from childhood to adolescence*. New York: Basic Books.
- 大野木裕明・杉村伸一郎・田中俊也 1991 親族関係の心理学的認知に関する探索的研究 福井大学教育学部紀要(第IV部) **42**, 117-130.
——1991.4.15 受稿, 1993.7.3 受理——